

イマヌスフ 米国出身の元カトリック信者 (2 / 4)

:

明:慈悲深き神を通して真理に到 すること。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 女性](#)

より: イマヌスフ

ED6 Jul 2015

集日 05 Jul 2015

さらに、私は神の道があらゆる 代のあらゆる人々のためのものでなければならないはずだと推 しました。一人として特 だったり、 ばれたりしてはおらず、また一人として除外されてはならないはずです。それは 在生きている人々、すでに亡くなった人々、これから生まれてくる人々も同 です。

私は、その教えが人 の 造と共に人々の に知られたものでなければ、慈悲深き神というものを信じることができませんでした。アダム の 造以来、そこには何らかの「秘密」が存在しているはずだとなんとなく思っていました。それは、私がそれまで得ることのできなかつた、あらゆる物事の「 」なのです。

私の家族にはいくつかの がありました。弟はアルコ ル中毒でした。彼は精神的に不安定で、 持ちでした。しかし、母はいかなる も彼の肩だけを持ちました。私はノイロ ゼになっていました。勉学にも集中できなくなり、私は大学を中退せざるを得ませんでした。

娘を保育所に けたままクラスに出席しなければならないことも心配の でした。私は彼女に最大限の 情を注ぎたいと っていました。祖父は日に日に弱っていき、母が仕事に行っていたある朝などは、 を椅子のクッションに落とし、ボヤ ぎを起こした程 でした。

家の火警が起いたのは、まさに寝耳に水でした。が充していたにもわらず私は深い眠りについており、私をようやく眠りから目醒めさせたのは、子供部屋からの娘の叫び声でした。

目をますと、家中に人がまっっていました。私はベビベッドから娘を抱き上げ、家から脱出しました。その際には消防が到着していましたが、弟は既に火のくすぶる椅子を庭に運び出していました。

弟はまず、椅子の前に座り込んで定で椅子の火をかき消そうとしていた祖父を傍らにやらなければならなかったそうです。祖父はもう私たちだけの力では介できない状態になっていました。

これをきっかけに、母は祖父を老人ホームに入居させることを真に始めました。その、私は彼を介する必要がなくなりました。しかし私は自立しなければならないことを母にはっきりと告げられました。私と娘は彼女の人生に必要ななかったのです。

弟はいつものように外で酒に浸り、祖父の心配をする必要のなくなった母は、男友と一緒にごすを得て、「自分の思い通りの人生をむことができるようになった」のです。

私は酷い状態になりました。夫とは婚の最中でしたし、依然として婚姻状態にはあったため福祉による付金を受け取ることもできませんでした。何らかの援助を申したとしても、まずは夫による育を求めるよう促されるだけで、彼からは一も受け取ったことはありませんでした。

彼は娘の育のために法廷で争うと私を迫しました。彼の背には人がおり、彼女がそれをけしかけていたのです。私には仕事に生活していけるはありませんでした。そのためには、娘を保育所にける必要がありました。

孤独感、そして解の口をつけられなかった私は苦しんでいました。私は周りの狂の中のただ一人の正な人であるように思えてきて、にはそれさえも疑でした。

私はひどい居心地の さを感じていました。祖母が亡くなった 、私は家族の中で居 所をなくしてしまい、完全に追い出されつつありました。 望した私は再び神にすがり、 にする答えを していました。

ある日、私は独りで家にいました。娘は彼女の父 と出かけており、母と弟も外出中でした。寝室の静寂の中、祈りに する い を感じました。ただ、その方法は全く知らなかったため、部屋の真ん中でどうすればよいのかさえも分からず突っ立っていました。

私はあたかも礼 の方法についての きを求めて耳を けるかのように立ち尽くしてました。神と会 するには清 かな状 でなければならないはずだとひらめきました。まるで何らかの上の存在の力に っ取られたかのように、私は浴室でシャワ を浴び、 から足の指先まで洗いました。

部屋に り、再び何か あるいは何者か が次に何をすれば良いのかを告げてくれるのを待ちました。私は再度、答えに かけました。自分自身を覆うことの必要性を感じたのです。

くるぶしまで被さる いガウンをまとうだけでは事足りず、 の毛も覆う必要性を感じました。 いスカ フを に いて を き んでみると、自分の姿に奇妙な安心感を えました。私はムスリムに会ったことがなく、彼らがどのような格好をしているのかも全く知りませんでした。そこにいる私はヒジャ ブをまとっていたのです。

イスラ ムを知る人が私を たら、礼 の をしているムスリムだと思ったことでしょう。しかし、当 の私はイスラ ムについては一切知りませんでした。神にこそすべての称 あれ。

お祈りのために着替えたものの、何をすれば良いのかまだ全然分かりませんでした。に行き、晴れ渡った外を呆然と眺めていました。次はどうしよう？
ひざまずくことには、教会で同じことをしていたため抵抗がありました。

私は神の御前において 虚になる必要を感じました。自分が 造主に して完全に服 する姿を取りたいと思いました。そのときは、床に横たわることしか思い浮かびませんでした。

再度、教会で牧 師や修道女が修道生活で床に横たわり、 腕を横に伸ばして十字架の形を作っている 面が に浮かびました。 造主の前にて 虚でいたいと思ったものの、それをどうすれば良いのか全く分かりませんでした。

するとひざまずいて、 を床に着けることを思いつきました。そうする前に、寝室が散らかっていたという ではありませんでしたが、床が れていると感じた私は、 に清 なものに づく必要性を感じました。

娘のベビ ベッドの横に、私が んだ彼女のベビ カ 用の小さな毛布がありました。 日、それはイスラ ムで礼 用として使用される 毯と全く同じ大きさであることに 付きました。そしてそれはちょうど洗濯した直 でした。それで私はそれを手に取り、私の前に敷いたのです。

さらに信じ いことに、私が向いていた方向はムスリムたちが礼 に向く方向である「カアバ」であることも 日知ったのです。私はひざまずき、 手で上半身を支えつつ、 を床につけました。

その日を思い出すだけで、目には が浮かび、 肌が立ちます。あの部屋、あの姿 で、私は明らかにムスリムのような身なりと礼 をしていたのです。スブハ ナッラ（アッラ に称 あれ）、そのような方法でお き下さった神のいかに慈悲深いことか！

あの姿 で、ついに神と通じ合えたことを感じた私は、何度も何度も ながらに神が私に求める信仰を示してくださるよう したのです。神が私にお望みの人生というものを 。

が止まりませんでした。その日、私は真理を 出したと感じました。ただ、空白を埋める必要だけが残されていました。そして慈悲深き主によるお きのおかげで、やがて私は答えを つけ出したのです。

母が依然として祖父の老人ホームへの居を考えており、私も引っ越しを要求されていたとき、感 祭の 期が れました。まだ私が 家にいた です。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2409>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。